



欧米と比較して、日本では若者は政治へ関心が薄く、「高齢者の高齢者による高齢者による政治」と揶揄されることもある。若者がより政治に関心をもつように選挙権を2015年に70年ぶりに満20歳以上から満18歳以上へ引き下げ、大人としての自覚を促すため2022年には成人の年齢も18歳に引き下げられた。SNSで世界中の情報を家にいながら集めることができるようになったため、今まで社会に無関心であった若者でも、SNSを通して主張できる機会を得て、その結果少しずつではあるが当選する議員の年齢が若くなっているように感じる。また、若者の活躍が多くの領域で目立つようになり、将棋界がその良い例である。

さて、医学界に目を移すと、いわゆる権威者と呼ばれる人以外にも若者の活躍が目立ってきたように感じる。多くの医師は情報を交換し、見識を深め合う目的で学術集會に参加、学会誌を読む、投稿をするなどの活動を行っている。権威ある学会誌は当然知名度も高く読者が多いため、掲載された論文は大勢の目にとまり、その論文は意義があるものとして評価されやすい。そして、良い研究報告が集まり、知名度がさらに高くなるという良循環を形成している。これまで論文の閲覧は、有料がほとんどであったが、最近では、無料で閲覧できる雑誌も増えてきている。無料であることでアクセスしやすく引用数が増え、雑誌のインパクトファクターが上がることで、投稿者、学会や出版社、読者ともにWIN,WIN,WINの関係となる。権威という尺度で雑誌の良し悪しを評価する時代の転換期に入ったのかもしれない。

SNSは無料でお手軽なツールであるが、自分と同じ領域に興味関心のある人たちの情報のみを集めてしまうと、偏りが出してしまう可能性は大きい。当然インターネットの検索エンジンを駆使している研究者はそのことを百も承知であり、情報の裏をとる、賛否の両面から情報を集め信頼性を確認することを忘れてはいない。しかし用意周到に対策

していても、生成AIの進歩などでフェイク情報が増える可能性があり、情報収集する側の真実を見抜く目をさらにきたえなくてはならないであろう。

研究のエビデンスのレベルとしては専門委員会や専門家の個人的意見、記述研究、コホート研究、非ランダム化比較研究、ランダム化比較研究、系統的レビュー、メタ解析とその信頼度は高くなるが、本当に、メタ解析が実際を反映するののかと思うとそれも少し怪しく、臨床にそのまま還元するには慎重であるべきである。EBMとNBMの両輪の必要性は以前からも言われているが、今後この2つの橋渡しをする領域が重要になると思われる。

第119回日本精神神経学会学術総会のワークショップで「精神神経学雑誌に掲載される論文の書き方(研究計画と統計について)」を編集委員会企画した。2名の若手の先生に、論文作成、投稿、受理までの体験談をお話いただいた。いずれもそのままの現状を知ってもらいたいという意図で、得られたデータをあえて複雑な統計処理しない手法を用いた研究論文であった。論文発表の目的は、人に認められ、組織や社会からの賞賛を得るためのみならず、多くの人に自分の書いた論文を読んでもらい、賛否はあるものの意見を交換することで、自分の研究をさらに深化させることである。日本精神神経学会員は19,881名(2023年4月現在)おり、また刊行1年後には非会員の人でも一部を除き無料でインターネットから閲覧できるため、潜在的な読者数は多い。精神科領域ではおそらく日本で一番であろう。日本語の表現でしかできない何かがあると思われる。ただ、ガラパゴス化しないためにも、日本語論文を英文翻訳できるシステムの導入も検討中であることや、論文の投稿規程にも英文でも投稿可能であるという記載があり、日本からのメッセージを海外に届けることもできる。これからも良き情報を発信していきたいものである。

忽滑谷和孝